

〈最終講義〉

私の教育社会学40年誌

門 脇 厚 司

私の教育社会学40年誌

門 脇 厚 司

ただいま、飯田先生からご紹介をいただきました門脇です。私の紹介を聞きながら、このまま飯田先生が75分間話した方が良かったんじゃないかと、涙が出るような感激を味わって聞いておりました。涙もろいところがあるものですから、ついついそんな気分させられて聞いておりました。

さて、いささか海千山千の私でありますけれども、久しぶりに緊張して、この花も生花なんです。胸に生花をつけてもらったのは結婚式以来ではないか思います。今度生花をつけてもらうのは葬式の時だろうと、緊張なんてものではなくて、硬直状態になっています。最終講義は生涯に一回あるだけです。普段緊張することのない私でも、さすがに緊張状態でここに立っております。

今日は、先ほど飯田先生の話にもありましたように、本当に40年間、私が教育社会学に足を入ってから40年になるわけですけれども、40年間、私がどんなことをやってきたのか、何に興味をもってやってきたのかということ自分で振り返るいい機会ではないかということで、「私の教育社会学40年誌」、「誌」というのは単なる歴史ではなく、記録という意味で雑誌の誌という字を使いました。私の40年間の研究の「しるし」「足跡」という意味で受け止めていただければと思います。しかし、この40年誌も、時間がなくて、パーフェクトなものを作りたいと思いつながら、中途半端なものになってしまいましたけれども、わざわざ速くからみえる方もおられるし、院生も、学生も聞くわけで、これまでに書いた論文の目録だけを冊子にして提供するのではよろしくなろうということ、私がどん

な研究法を用いて研究してきたかに最も多くページを割きました。このテーマではこんな方法を使いました、こういうテーマなのでこういう方法を自分で工夫して用いました、すると、こういう成果が得られました、そんな研究法のいくつかを整理したわけです。これから研究の道に入る若い学生院生諸君にもその一端がわかるようなものを作りたいです。ですから、これを手にした皆さんの今後の研究のために、何ほどの役には立てていただけないのではないかと多少自負を感じながら作りしたので、後で丁寧にお読みいただきたいと思っております。

まず、こう言い訳をさせていただいて、与えられた時間で、冊子の第2部「私の教育社会学40年誌」を中心にお話させていただきたいと思っております。第2部は3ページから14ページですけれども、大体それに沿いながら話をさせていただきます。

今日の紹介にありましたけれども、私が生まれたのは1940年、昭和15年、父親が「竹中工務店」という会社の社員だったために、戦前から中国に支店を置いていました。そんなことで、父が青島支店に勤務している時に私が生まれ、そのあと北京支店に移りますので弟は北京で生まれています。青島（チンタオ）生まれ北京（ペキン）育ちということになりますが、父親が北京で軍隊にとられたため、母親が実家のある山形の庄内に戻ってきました。小学校に入る一年前です。以来、小学校入学から高校卒業まで山形県の庄内で育ちました。こんなことを私が言いましたのは、先ほど飯田先生の紹介にもありましたように、私はわが国の教育制度がまったく新しくなった昭和22年の4月に小学校1年生に入学しました。まさにこの時期に、教育社会学なる学問が日本で立ち上げられ制度化

されていたわけで、その過程と私の義務教育時代と重なっていたということを理解していただきたかったからです。戦後の新教育が華々しくスタートした1947年4月に、新教育の1期生として、私は小学校に入りました。私は、明治以降100年のわが国の教育の歴史の中でも、昭和22年から32年までのほぼ10年間は後世に誇るべきいい教育を行っていたのではないかと思います。まさにその1期生として義務教育9年間で身をもって体験したということが、飯田先生もおっしゃっていましたが、私の教育に関する考え方、あるいは教育学者の原点を培っていたのではないかと思います。私が40年間おつきあいすることになった教育社会学が、まさにこの時期に産声をあげていたのだということをごここで改めて強調しておきたいと思います。

冊子を作った後で、漏らしてしまったことに気づき、「しまった」と思ったのですが、1947年4月15日という日付を書き加えていただきたいと思っています。1948年9月から12月までの間に第1回目の「IFEL」が行われたと書いてありますけれども、そのほぼ1年半前の1947年4月15日に、ここに創刊号の現物をもってきていますけれども、『社会と学校』という雑誌が創刊されました。これは、私の恩師である石戸谷先生から、亡くなる前に、いただいたものですけれども、これが発行されたのが、昭和22年4月15日。西暦で言えば、1947年の4月15日ということですね。この創刊号の26ページに載っているわけですけれども、昭和22年の2月15日という日付で、「東京文理科大学」、東京教育大学の前身の、筑波大学のさらにまた前身の前身の東京文理科大学の中に、教育社会学科というものを発足させたという記事があります。その中に、世話人として、若い人は名前を聞いてもわからないかもしれませんが、われわれの年代だったら、歴々たる人たちがだというのがわかりますけれども、世話人として、石山修平先生、それから岡田譲先生、社会学が専門ですね。石山先生は、教育哲学が専門ですけれども、それから、日本史の大家といわれた和歌森太郎先生、それから内田寛一先生。内田先生は私は存じ上げないの

ですけれども、この4人が世話人になって、昭和22年の2月15日に、教育社会学会をスタートさせているのです。ですから、日本における教育社会学の産声は、われわれのこの筑波大学の前身である東京教育大学、及び東京文理科大学でスタートしたと言ってもいいぐらいなのです。教育社会学はそれだけ、この筑波大学と、あるいはこの教育学系と縁が深い学問であると申し上げておきたい。先ほど申し上げたように、『社会と学校』の創刊号は、4月に刊行されるわけですけれども、この雑誌は教育社会学会の機関紙として刊行されていたのです。この雑誌は昭和26年6月まではほぼ4年間刊行され続けていたのですけれども、編集後記は、すべて「TI生」というペンネームで書かれています。このペンネームで書いた人が誰かと言うと、お分かりの方も多と思いますけれども、Tというのは哲夫、Iというのは石戸谷ですから、石戸谷哲夫先生だったのです。昭和22年の4月から昭和26年の6月まで、創刊第1号から終刊号まで石戸谷先生が書いていたわけですね。私は編集後記だけをコピーしたものを1冊にまとめてもっていますが、これを読むだけで日本の教育社会学が、スタート時点でどういう意識を持ってきたのか、なぜ教育社会学が必要だったのかということが、非常によく理解できます。そこで、これからの私の話にも関わりますので、その一部を紹介しておきたいと思います。創刊号になぜこの学会を立ち上げたかということが書かれています。

「教育を社会的現実として捉え、教育学を社会科学の基礎において発展させようとするのが教育社会学の立場である。そのためには広い意味での社会科学、政治学、法律学、経済学、社会学、史学、地理学などが社会の人間形成力について、常に探求を進めねばならないし、教育学はこれらと深く結びついて展開されなければならない。われわれはこのような意図のもとに教育社会学会を持つことになった。東京文理科大学の有志者が、世話人のつもりで仕事をはじめたわけである。」と。

こういうようなことを設立の趣旨として書い

ているわけですね。では、その創刊号の編集後記にわが恩師だった石戸谷哲夫先生がどんなことを書いているかという、「新教育が健やかに成長していくためには目指す社会的現実の土壌が科学の土で深く掘り下げられなければならない」だとか、「社会的現実の実験的・実証的把握をする」だとか、「そういうことが本誌の趣旨である」だとか、「実践的であろうとし」「科学的な裏づけをも忘れないように行きたい」というようなことを書いているわけです。『社会と学校』の創刊号で説明されている、「教育社会学がなぜ必要か」を今読むと、私は、こういうような目的でスタートさせた学問であったからこそ教育社会学に惹かれたのだと実感できるわけです。それから50年以上たった今でも、教育社会学がどんな学問でなければならないか、また教育学が科学性を持たなければダメだ、実証性を持たなければダメだ、その上で実践的であればいけないんだ、という主張は生きています。そこに惹かれながら、私は教育学や教育社会学と40年間付き合ってきたのだと思います。

そんな関心と志で教育社会学の道に入った私が、どんなテーマに取り組みどんな方法で研究してきたについては、この冊子の第3部に整理しています。これも時間がない中で必死になってまとめたものです。幸か不幸か、今年度のマスターコースの授業で、修士課程の教育研究科の授業で、「教育研究法」を1学期担当することになりました。毎週1回の「教育研究法」の授業のために作った資料が第3部になっています。教育社会学の研究法は理論研究、調査研究、実験研究、歴史研究、比較研究と広いのですが、自分をダボハゼ精神旺盛な人間であると自覚している通り、私はこれらすべての研究法を用いて研究し、それなりの研究成果を挙げてきたと自負しています。具体的に、どういうテーマに取り組み、どういう手法を用いて研究してきたかについては3部を丁寧に読んでいただきたいと思います。理論研究でいえば、卒業論文ではタルコット・パーソンズの「行為の一般理論」をテーマにし、修士論文でベースにしたのが、マックス・ウェーバーの宗教社会学でした。学

部の2年生の時に、馬場先生の教育社会学演習の授業に出ました。その年から学部の2年生でも演習の授業に出てよろしいということになり、私が選んだのが馬場先生の教育社会学のゼミでした。その授業でテキストとして使っていたのが、ガースとミルズの共著『Character and Social structure』でした。今でも私の大事な本のひとつにしているわけですが、今日ここへ持ってこようと思ったのですが、このあとベスタロッツ祭があるので、どこかでなくすのではと思って研究室に置いてきました。この『Character and Social structure』という本に出会ったのが、教育社会学に深く入り込む直接的なきっかけです。この本を書いたひとりが、アメリカのライト・ミルズというすごい社会学者でした。その本の中で紹介されたのが、マクロ・レベルでのマックス・ウェーバーであり、ミクロ・レベルでのジョージ・ハーバード・ミードでした。この二人の大学者に遭遇したことが、私の研究者としてのベースを作ってきたのではないかと、思っています。次いで、マックス・ウェーバーをやるとしたら、対抗馬のようなフランスのデュルケムという学者の理論はどうしたって理解しなければならない、ウェーバーをやるとしたら、同時に平行してデュルケムについての造詣を深めなければならないということですね。ウェーバーとかデュルケムをやるとしたら、第三の社会学者と目されている、ゲオルグ・ジンメルという社会学者の理論も理解せざるをえないということで勉強しました。冊子にあげたような学者たち、デュルケムとかジンメルとか、トーマスだとか、G・H・ミードだとか、アルフレッド・シュッツだとかの理論について、独立した論文を書いていませんが、実証研究するときの理論としては相当に役立ててきました。調査研究や歴史研究についても、こんなふうに解説していると時間がなくなりますので、あとは40年誌をお読みいただくことにして先を急ぎます。

先ほども言いましたけれども、われわれのこの大学、筑波大学、東京教育大学、東京文理科大学は、教育社会学のゆりかご的な役割、教育

社会学を育てる一番おおもとの役割をした大学だということを皆さんの記憶に留めておいてほしいと思います。

さて、東京教育大学、東京文理科大学で教育社会学会なるものが産声をあげた、その一年半後の1948年から、日本教育社会学会が生まれる動きが始まるわけです。IFEL という、みなさん知らないかもしれませんが、「Institute for Educational Leadership」という講習会が始まる。なぜこういう講習会が始まったかという、日本の教育学をもっと科学的にしないといけないということで、教育学部の先生になる人は必ずこの講習を受けて、合理的な考え方、科学的な思考法というものをきちんと身につけた上で、次の時代の教師の養成にあたれということで、GHQの指図で講習会が継続的になされたわけです。その講習会に出ていた19名の人たち、この19名は後に全国各地の教育学部の教員として赴任することになるわけですが、こういう人たちが集まって、日本教育社会学会を立ち上げることになるわけです。学会が正式にスタートするのが1949年の11月23日、勤労感謝の日ですけれども、第5回目のIFELの講習会が行われたその最中に、東京大学で第1回の研究大会を開いたのが日本教育社会学会が正式に発足した日になっています。私が日本教育社会学会の会長を務めていた時に、ちょうど50周年にあたったわけですが、その時、1949年が学会の正式な発足の年だということが周知されました。発足時点で会員になった人たちは158名。日本教育社会学会の機関誌である『教育社会学研究』の第1集の一番最後のページに会員の名簿が載っているわけですが、そこに名前を連ねている人たちの数を数えてみると158人、日本教育社会学会の現在の会員数は1400人ほどですから、今の十分の一程度のメンバーだったわけです。第1集には役員の名前も載っていて、そこには評議員として、石山修平先生だとか、安藤龜雄先生だとか、あるいは幹事としては大浦猛先生だとか、馬場四郎先生、私のもう一人の恩師になる先生ですけど、馬場四郎先生ですとか、社会教育担当の平沢薫先生だとかという人たちが

役員リストにずらっと並んでいます。こういう記録を見ても、日本教育社会学会のスタート時点から我々の先輩たちがかなり重要な役割を担っていたということを窺い知ることができるわけです。

その年の12月には、西本三十二さんという人を中心にしながら、教育社会学のテキストが作られることになりまして、翌年の50年の3月には、『教育社会学研究』の第1集が刊行されます。今、『教育社会学研究』は74集まで刊行されていますけれども、この第1集が1950年の3月に刊行される。この年の6月に馬場四郎先生という、私の後に恩師になる先生が、国立教育研究所の職員から、東京教育大学の助教授として赴任しました。この時点をもって、茗溪教育社会学研究室が正式にスタートしたと言えるだろうと思います。馬場四郎先生は、それ以前に、助手として、先ほど紹介した『社会と学校』という雑誌の編集などもやっていたのですが、国立教育研究所にいったん移られて、再び、東京教育大の教育社会学講座の担当者として赴任したのが1957年でした。私が東京教育大学に入る4年前です。

ということで、私が東京教育大学に入学した時には二人の先生がおられて、まさに、茗溪教育社会学が一気に発展するその時期に運良く入学することができたことになるわけです。先ほどもちょっと言いましたけれども、学部2年の時に馬場四郎先生のゼミに入るとということで、どんどん深みにはまっていくことになるわけです。2年次に馬場ゼミに出ている最中に、先生に「君もやってみろ」と言われてやったのが調査実習です。4ページの下に写真も出ていますが、思い出深い写真ですけど、1962年の夏休みに前橋市の郊外の農村婦人調査という、これは3年生の授業として馬場先生が担当して行った調査ですが、これまでもそういう調査は毎年やっていたようですし、私が最初に調査に入ったのはこの前橋市の農村婦人調査だったわけですね。で、この調査の最中に馬場先生が過労で倒れるという事件があって、この調査は、石戸谷先生が我々の指導にあたっておりました。

4 ページの下の写真ですが、真ん中に自転車の後ろに立っているのが石戸谷先生です。馬場先生はこの時は病院のベッドでうなっていたというようなことで写真には入っておりません。こういう話をし始めますと時間がどんどん過ぎてしまいますので端折りますけれども、皆さんもお名前をご存知だと思いますけれども、この写真には深谷さんご夫妻、それから岩内さん、伊藤敬さんも入っています。この調査には大学院生も参加していたということです。この調査を経験することで、私は調査というのは面白いんだということを実感するわけですね。翌年、1963年の11月19日、第15回目の日本教育社会学会の研究大会が東京の青山学院大学で行われたわけですけど、そのころは「学生部会」という発表部会があって、今は学生部会というはなくなっていますけれども、当時は学部の学生でもいい研究をした者は発表してもいいという部会がありまして、そこで私が「近郊農村における婦人の社会的意識と地位」というタイトルで発表しているのです。このことを私はしばらく忘れていたのですが、この冊子を作る前に、小野浩さんという山梨大学の教育学部の教育社会学担当だった先生が関係資料を全部私に送ってくれていました。送ってもらった資料の中に第1回大会プログラムから今日までのプログラムのほとんどが入っていたんですね。それを見ていううちに、「なんだ、第15回の大会で自分が発表していたんだ」ということがわかった訳です。学会の研究大会で発表しているということは、会費を払って正式の会員になっているということですから、学部の3年生の時に日本教育社会学会の会員になっていたはずで、この年が1963年ということです。以後、私は教育社会学の正規の会員として40年間会費を納めてきたと言っていいだろうということで、今日お配りしました冊子のタイトルを「私の教育社会学40年誌」とさせてもらったわけです。以来、私は、教育社会学会の会員として、辞典編集の雑用に始まり、庶務部長、事務局長、紀要編集委員長、理事、果ては会長まで、ほとんど全ての役目役職をやってきたように思います。

それはともかく、茗溪教育社会学の研究室のことで言えば、この年1963年に「木曜会」という大学院生の研究会にも誘われて参加するようになりました。この木曜会に学部の3年生でしたが、顔を出すようになったわけです。当時木曜会に出ていた、記憶に残っている私の先輩たちの名前を5ページの真ん中あたりに書いておきました。この先輩たちが、若い教育社会学徒として、研究成果を報告し、それをめぐって喧々諤々と議論し、共通のテーマを勉強しあう。研究会が終われば茗荷谷駅前の中華料理屋で一杯飲む、というその末席に私が席を占めることができたのも幸運なことだったと思います。お名前はいちいちあげませんが、この研究会に出席されていた人たちはその後、本当にいい研究成果をあげておられています。そういう人たちがまだ若く澁刺と研究に情熱を燃やしている中に私がいることができたというのは本当にありがたいことだったと思っています。

冊子の6ページにその時の思い出の写真載せておきました。1966年3月に馬場先生が教授に昇進されまして、それをお祝する意味を込めて、八王子の大学セミナーハウスで一泊二日の研究会を開いたその時に、その研究会に参加した人たちが撮った記念写真が6ページの写真です。みなさんも顔と名前をご存知の方も多かもしれませんが、この時期は茗溪教育社会学が急速に発展を遂げ、わが国の教育社会学をリードしていた時期だったと思っています。

木曜会に出て先輩たちの刺激を受けているうちに、卒業論文をまとめる時期がきてまとめた卒業論文が「行動科学的教育学研究序説」でした。カタカナもひらがなも一文字もない大袈裟な名前をつけた論文でした。当時は高名な社会学者パーソンズが社会学者の間でブームのような状態にあって、パーソンズを勉強してないのは社会学者としてもぐりだと言われるぐらい、パーソンズ、パーソンズと言われていたわけです。そんなわけで、私もパーソンズの『Toward a General Theory of Action (行為の一般理論をめざして)』という原書を読み解きながら、「行動科学的教育学研究序説」という卒業論文を提

出したわけです。今考えると、その当時から私が目指していたのは、「確かな証拠に裏付けられた、科学的な、実証性のある研究によって得られた証拠にもとづいた、人間形成に関する理論とを構築すること」だったということです。evidence based な人間形成理論を構築することが教育学をもっと発展させる、しかも実践性のある学問として発展させるのに重要なのではないか、という志を抱いていたのだと思います。今考えても相当大風呂敷だと思いますけども、そういう風呂敷を掲げた以上、自らその道を歩まなければならないというようなことをこれまでしてきたのではないと思うわけです。大学を卒業し、そのまま大学院に進みました。中学校の数学の先生になることを志して大学に入ったわけですが、馬場先生からの強い勧めもあって、とにかく受験だけはしようと受けたら引っかかっていて、その後、新聞社に逃げたりもしましたが、ずるずるとここまで来てしまいました。よほど東京教育大学とは縁があったということでしょう。

マスターに入って、その時に阪本さんという学部の学生とマックス・ウェーバーを原書で読むということをしていました。その頃は、まだ翻訳書がそんなにありませんでしたから、難解なウェーバーの本を、辞書を舐め舐め読みしかなくて、ドイツ語の辞書を一冊つぶすような経験をしています。そんなわけで、マスター時代は、ウェーバー、ウェーバー、ウェーバーということでしたから、マスター論文もウェーバーの宗教社会学で書こうと真剣に考えていました。それで、そういう論文を書いていいかということ馬場先生に相談しに行きました。そうしたら、「君はどこの研究科に入っているのだ。ここは教育学研究科だよ。」と説教されて、「あ、そうか。」ということで、急遽テーマを変えて書いたのが「現代青年の価値意識構造」という論文でした。この論文の執筆についてもいろいろ思い出があるわけですが、これが後に青年の問題に深くかかわるきっかけになったと思っています。その手始めが日本の若者たちの自己形成への関心となっていきました。現代の青年だけ

でなくて、日本の若い世代はどういう人間になろうとがんばってきたのだろうか、どんな人間になりたくて自ら切磋琢磨しながら、自己研鑽しながら成長してきたのか、そのプロセスを、明治時代まで遡り、「近代日本の精神形成研究」というテーマで研究することができるのではないかと考えるようになりました。そのためにはどんなデータを使ったらいいのか。そこで目をつけたのがいわゆる「出世本」でした。そして、古書展（古書店ではない！）などに頻繁に通い、貧乏大学院生でありながら、身銭を切って立身出世するためのノウハウを書いた古本を集め始めました。明治時代には、「こうすれば出世できる」という出世本がやたらと出回っていたようで、また、その当時、そんな本が研究資料になるなどと考える人は誰もいませんでしたから値段が安いわけです。ですから、貧乏院生でも買えまして、今、私の研究室には少なく見積もっても200冊以上の出世本が眠っています。いずれ、何とか分析し一書にしないとけないと思っていますけども。そのなかの一部を紹介しておきますと、有名な「西国立志篇」というのがあります。これはスマイルズの Self Help の翻訳本ですけども、この「西国立志篇」が明治の前半の超ベストセラーになったこともあって、西国立志篇にあやかる本が続々出版されています。冊子の89ページにそうした本の写真を載せていますが、本のタイトルの文字が読めるだけでも、「女子立志編」だとか「東洋立志編」だとか「修業立志編」だとか「少年立志編」だとか「帝国立志編」だとか、いろいろあるのがお分かりと思います。ついでに言えば、こうした出世本や立身本の類は江戸時代にも相当あるわけですね。そこで、こうした出世本で、立身とか、立志とか、出世がどういう意味で使われており、どんな変遷をたどったのかを分析して、「日本的立身出世の意味変遷」という論文にまとめて、『教育社会学研究』に投稿して載せてもらったのが、立身出世研究の私の最初の仕事だったわけです。それがもとで、このテーマ以外にも歴史的な研究に手を染めるようになって今日に至っています。出世研究については、そ

の一部を7ページに写真を載せてありますが、『現代のエスプリ』の一冊にまとめるとか、あるいは『現代の出世観』という日経新書にまとめたりといった仕事もしてきました。『現代の出世観』は、私が日本経済新聞社で仕事をしている時に、ステイタスシンボル調査をやる機会があって、そのデータをもとにして新書にまとめたものです。大学院のドクター時代にはそんなこともしていましたけれども、やはり大学紛争が記憶に強く残っています

大学院を卒業してすぐに、先輩の一人である山本恒夫先生の誘いで、淑徳大学というところに専任の講師として赴任しました。今は、大学院生はオーバードクターになってもなかなかポストがないという悲しい状況ですけども、私の時代は色んな大学から誘いがあって有難いことだったと思います。卒業と同時に淑徳大学の社会福祉学部で教鞭をとる機会を与えてもらったのですが、今から考えると贅沢というしかありませんが、辞表を書いて一年で辞めさせていただきました。大変居心地のいい大学で、このままこの大学で40年も教鞭を取り続けぬるま湯に浸かっていたら、人間として私はどうなるんだろうかと考えて、もう一度、厳しい環境に自分を放り出さないといけないと考えてのことです。

こうして飛び出したところが日本経済新聞社でした。新聞社に席を移して、全く違う世界で仕事をするようになったわけです。これまで、日本経済新聞社で私がどんなことをしていたかはあまり公表してきませんでした。今日は最終講義ということもありますので、一部話をします。どんなことをやっていたかを冊子の7~8ページに書いてあります。そんなことまでやっていたのかと思うかもしれません。『企業イメージ』とか、『新しい消費群』とか、そういう本も日本経済新聞社編として出版しています。これらの本の主要部分は私が書いています。こうした仕事は一見無駄なことをしているように皆さん思うかもしれませんが、その当時、調査をしてIBM社に頼んで多変量解析などやると、一回で数百万かかる時代でした。当時は大学では多変量解析はほとんどやっていませんでした。

また、やりたくともやれないほど高い費用が必要だったわけですね。今はSPSSなど廉価なソフトがどこの大学にも用意されていて高度な多変量解析ができますけども、そのころ大学では無理でした。ところが、日本経済新聞社は、日本の高度成長期に乗って年々右肩上がり売り上げを伸ばしている時期でしたから、お金はいくら使ってもいいということで、こんなおいしい話はないということで、新しい手法をどんどん試してお金をおおいに使わせていただきました。私が調査費として使った費用は多分数億に上ったのではないかと思います。そんなことで、仕事をして給料をいただきながら、新しい解析手法をどんどんマスターすることができました。しかも、多変量解析については、数量化理論を開発した林知己夫さんから直接伝授してもらえました。これも新聞社にいたメリットですけれども、あの先生とお近づきになりたいと思って、新聞社の名刺を持って近づいていくとだいたいみんな仲良くしてくれるというようなことで、林先生とも一緒にやれる仕事を仕組んで、林先生から直々に数量化理論を教えてもらったという、これもおいしい話でした。そんなことで、後に大学で使うことになった調査手法や分析手法については、ほとんど日経時代にマスターできたのではないかと考えております。

冊子のどこかに書いたと思いますけれども、馬場先生が亡くなって教育大に戻るようになって、現学系長の桑原先生の先生である倉沢栄吉先生の研究室にご挨拶に行ったわけです。「しばらくご無沙汰しておりました。新聞社で油を売っていたものですから。」と挨拶しましたら、即座に、「君は油を売っていたんじゃないだろう。油を買ってたんだろう。」と言いました。その時、「えっ、この先生はやはりすごいな。頭の回転の速い人だな、人をよく見抜いているな。」と思ったことをはっきり記憶しています。とにかく日経では、企画調査部というところにいたこともありますけども、調査についてはいろんな手法を学ぶことができました。それ以上に、新聞社の最大のメリットは、いろんな人と会えることですから、仕事を通して、マスコミ界だけ

でなく、財界、政界、官界にもいい人脈をつくることのできたのが一番の財産かもしれません。

日経時代のことで、もう一つ話しておきたいことがあります。それは新しい学校づくりにかかわったことです。私の先輩の一人である本吉修二さんが、今の学校というのとはろくな教育をしていないんじゃないか、まっとうな教育をしていないんじゃないか、と考えておられて、今の法律の下でもまっとうな教育をしようと思えばできる、そのことを証明してみようじゃないかといって、実際に新しい学校を作るために動き始めました。じゃ、どんな学校がいいか。日本経済新聞社の1階に太陽樹という喫茶店があって、そこに本吉先生がしばしば通ってこられて、二人で青写真を作っていました。その学校は、今、「白根開善学校」という名前です。今年25周年を迎えましたけれども、その学校の青写真を作っていたことも日本経済新聞社時代の思い出になっています。そんなこんなで、いいところへ来たと思いきや楽しく仕事をしていたところへ、まったく予期しないことでしたが、馬場先生が57歳で急死するという事態が起ったわけです。筑波大学の創設に相当エネルギー使っていた先生で、冬の筑波にキャンパスになる土地の下見に来られ、ふきさらしの中に長く居たせいか、脳梗塞で倒れ、それが命取りになったといっただけです。1972年の6月15日に急逝されるということで、私の運命もここで大きく変わるわけです。それで、「お前戻ってこい。」ということになって、「こんないい職場をやめるわけにはいかい」と駄々をこねたりしましたが、結局残ったもう一人の恩師である石戸谷哲夫先生が筑波大への移転の大変な時期に苦勞されているということで、移転が完了するまでお手伝いするということならばと母校の東京教育大学に戻りました。それが、まさか30年も勤めることになるとは思っていませんでした。

講師から助教授になって筑波大学に移ってきたわけですが、助教授時代は、本当にいろんな仕事をやることになりました。そうなった陰には、日本経済新聞社時代に培った人脈があつたことだと思います。日本経済新聞社時代の知人

友人たちが「こういう仕事をやってみないか、こういう仕事をやってくれないか」ということで、次々にいろんな仕事をもち込んでくれました。考えてみればありがたいことで、自分がやりたいと思ってもなかなかできないような仕事を次々にやらせてもらえることになったわけですね。詳しくは説明しませんが、そうしてさせてもらった仕事の成果の一端を、冊子の10ページ、11ページあたりに写真で載せておきました。この写真を撮るときに気づいたのですけれども、11ページに、アマティアル・センさんの『The Standard of Living』があります。アマティアル・センさんといったら、みんな、あの1998年にノーベル経済学賞をとったあのセンさんだと気づくと思いますけれども、アマティアル・センさんの本に既に目を通していただくと、今となるとすごい本を読んでいたんだと自分でも思うわけですが、そんなことも含めて、次々に意義のある仕事をさせてもらえました。そういう意味では良かったと思います。ある意味では、東京教育大学に戻って以降の助教授時代に、一番力を入れて仕事せざるをえない機会に恵まれたということもできるのではないかと思います。学会活動の方も、40代ということもあって、いろんなことをすることになりました。助教授時代は教育社会学会への貢献でも一番充実していたのではないかと思います。

そして、1991年の秋に教授に昇進しました。昇進後すぐにイギリスの大学で1年間教えるという機会に恵まれましたが、イギリスから戻って来てすぐに、先ほどの紹介にもありましたけれども、人間学類長という立場になって、それからはいろんな管理職的な仕事をするようになりました。学会の会長だとか、官庁や役所や様々な学会の委員会などのまとめ役とかです。結局、こういう仕事に時間を取られ、研究に回す時間が無くなっていただけですけども、その中では、『東京都教育史』全5巻の資料収集と執筆にかかわったことが研究面では一番思い出に残ることです。また、教授時代は、先ほど、飯田先生からもご紹介がありましたけれども、「社会力」という概念を作るということになって、それを

手を変え品を変え説明するための本を書くことになって、今「社会力シリーズ」ということで6冊目になっておりますが、そういう本を書き続けることで教授時代を過ごすことになったと言えると思います。

私と教育社会学との関わりを急ぎ足で辿ってきたわけですが、40年間振り返ってみて思うことは、よくこんなことがやれたものかどうか、よくここまでやってきたものだ、と我ながら思います。資料などを整理しながら、よくまあこんなことまでやったものだ、と我ながら、驚いたり呆れたりでした。しかし、今考えると、乞われるままにいろんなことをやってきたその結果、自分が本当にやらなければいけないと思っていたテーマが、次々に後回しになるということにもなったわけです。私の、先ほどの飯田先生の紹介にもありましたけれども、ダボハゼ精神が旺盛ということもあって、東京都とか経済企画庁とか、自治体とか、あるいは様々な民間の研究所とか財団とか、放送大学とか、いろんな所から次々にいろんな仕事をやってみないか、やって下さい、と持ち込まれてやってきたことは、そのためにやりたいことを後回しにしたことを割り引いても、やはりすごい幸運に恵まれたと言うしかないと思っています。とにかく、次々に持ち込まれるそういう仕事をやることになったのは、私の中に、社会と人間への飽くなき関心があったということだと思います。人間というのは、それを、「子ども」と呼ぶか、「青少年」と呼ぶか、「高齢者」と呼ぶか、あるいは「国民」というか、「市民」というか、「消費者」というか、とにかくいろんな言い方、呼び方をすることができますが、すべてその実体は社会で生きている「人間」なわけですね。そういう人間に関わることだったらすべて関心の対象になるという、そういう性分の人間であるものですから、人間にかかわるテーマであれば、「あ、やってみたい。」とすぐに思ってしまうわけです。それで、引き受けてやり始めると手抜きができないという性分でもあるものですから、ついついやってしまう。時には、やりながら何らかの障害があるとか、やろうと思っ

ても誰もできないでいることなどがあつたりすると、「だったら、自分がブレイク・スルーしてやろうじゃないか。」とつい深入りしてしまうものですから、大変だからやめるとか、撤退するというにはならず、前に進むということになる。そうしてきた結果、調査の仕方とか、データの収集の仕方とか、新しい手法を相当自分で開発したり作ったりしてきたという自負が私にあるわけです。そうしたあれこれについては詳しい説明はできませんが、冊子の第3部にやや詳しく説明していますので、私がかような意図で、こういう方法を開発し、こういう成果を出しました、というその具体的な内容についてはあとで見たいと思います。

こんな40年間であります。今振り返ってみて思うことがいくつかありますけれども、とにかく、先ほども言いましたけれども、いろんなことを仕事としてやらせてもらうような機会を次々に作ってもらえたということが、本当に、学者研究者冥利に尽きると思います。私は、今だから白状しますが、科研費の審査はしたことがあります。自分では書類を一度も書いたことはありません。こんなことが自慢できるのか躊躇するのですけれど、書いてある暇がなかったと言ったほうが正解かもしれません。それだけ、次々に「このお金を使ってください。」とってくれた人がいたというのはありがたいことで、こんな条件で研究できた人はあまりいないのではないかと、思うくらいです。どのくらい私は使ったのだろうか、さっき10本くらいの大きなテーマだけ勘定してみたのですが、少なくとも見積もっても3億円は使っているはず。本当に今考えると有難い話です。そういう機会を次々に作ってもらえたというのは、新しいことをするチャンスを与えてもらって、それにチャレンジすることで、自分がこんなことができると思っていなかった能力を次々に開発させてもらえたということでもあります。また、それ以上に有難いと思うのは、そういう研究を通して、いろんな他の分野の人たちと共同研究ができたことです。いずれ一緒に研究した人たちのリストアップをしたいと思っていますけれども、

ざっと数えただけでも100人にはなるだろうと思います。私と同じ教育社会学研究室の先輩たちも、もちろんですけども、それ以外の人たちといろんな研究することができたというのは本当に有難い話だったと思います。それと同時に、雑誌とか新聞とかからいろんな寄稿の依頼が相次いであったということも、忙しい思いをすることになったわけですけども、今となればそういうチャンスを与えてもらったのは有難いことだったと思います。そうした研究の成果を本にまとめる機会をいろんな形で作っていただいたのも大変有難いことでした。背表紙に私の名前が出ている本だけでも34冊になっています。まさかこんな数になっているとは思っていなかったのですけども、手元の本を整理してみると34冊。その中で、単著が何冊かと数えたらちょうど10冊。すると、残りの24冊というのは共著か編著でして、それだけの共著や編著を出せることになったのも、やはり、いい研究仲間にも恵まれたことの証でもあるわけで、本当に有難いことだったと思っています。

こう思うと同時に、大変申し訳ないというか、この冊子の中でも「不本意」という文字を2ヶ所使っていますけれども、大変申し訳なく思うと同時に不本意だったことが一つあります。それは何かといいますと、まもなくこの筑波大学から「教育社会学研究室」が消えていく運命を私が作ってしまったということです。そういうことになるとは考えていなかったことですが、結果としては、「教育社会学」という授業科目が大学院の研究科の授業から消えてしまうことになったわけです。飯田先生がいる限りは存続すると思いますけれども、教育社会学は人間学類の授業として残るだけで、大学院の人間総合科学研究科の授業科目としては「教育社会学」が消えてしまいました。ということは、教育社会学を担当する教官を将来必ず招き入れるという機会が無くなるということで、当然、その授業を開講し教育する機会がなくなってしまう可能性を作ったということで、こうなったのは、すべて私の責任だと思うところがあるものですから、極めて残念な気持ちで、また教育社会学の

研究室を巣立っていった方たちに申し訳ない気持ちで、今、ここに立っております。

本当に大急ぎで40年間の話をさせてもらいましたけれども、最後に、30年間、東京教育大学も含めて30年間、東京教育大学及び筑波大学の教育学科、教育学系という伝統ある組織に、こんな私が、フル稼働できる形で置かせてもらったことに心から感謝を申し上げておきたいと思っています。また、陰に陽に、私を支えてくださった同僚の皆様にもこの機会に心からお礼を申し上げておきたいと思っています。とりわけ、私を先ほど紹介して下さった飯田先生には、山形大学から無理を言っ来てもらってほぼ20年近くになるとは思いますけれども、飯田先生がいたからこそ、あれもやったりこれもやったりというわがままをさせてもらったのではないかと感じており、深く感謝します。飯田先生がいなかったら、恐らく、こういう終わり方にならなかったと思うにつけ、飯田先生には、心から厚くお礼を申し上げたいと思っています。

最後になりましたけれども、授業その他でいい学生といい院生に恵まれたことも、教師冥利に尽きることでありまして、今日も何人か遠くから見えておりますけれども、そのことについても深くお礼を申し上げておきたいと思っています。そんなあれこれすべてを、関係者の皆さんのお陰と、厚くお礼を申し上げながら、最終講義でありながら講義には到底ならなかったような話になってしまいましたけれども、これをもって私の筑波大学における最終講義とさせていただきます。

最後まで耳を傾けていただきありがとうございました。